

下関市国際交流員 李 佳琦
(中国山東省青島市派遣)

「なんというおもてなし！」

今年4月から下関市国際交流員として勤務しています、中国山東省青島市からまいりました李佳琦（リ カキ）と申します。改めまして、この度国際交流員として下関市に派遣されたことを光栄に思っております。

ご存知のように、今年は青島市と下関市の友好都市締結45周年という記念すべき年にあたります。7月の下旬に、下関市の一行と青島へ訪問したところ、とある会食会で面白いエピソードを伺いました。

それは十何年前に行われた周年記念式典、青島市訪問団が下関市に訪れた時の話です。晚餐会で、下関市の名物、和食の高級食材、日本の方々に親しまれている海の幸のひとつ、つまりふぐ料理が出されました。なんというおもてなしでしょう。残念ながら、ふぐという毒で名高い食材は、当時はまだ青島市民に受け入れられていませんでした。訪問団一行は誰もが躊躇し、ふぐに箸を付けられないでいました。すると、当時の下関市長は、このような話をしてくれたそうです。

「皆さんの心配は理解しています。私が先に食べてみせますので、10分後の私の様子を見てください。もしちゃんと生きていれば、皆さんも怖がらずに食べてみてください。」

そして、下関市長はふぐを食べ、10分経っても何の問題もなく生き生きとしていました。そのおかげで、青島訪問団は下関市の味覚を肌で感じる事ができました。

その後、養殖ふぐを含めたふぐ食文化が発展してきた青島市では、ふぐは多くの市民にとって馴染みのある料理になりました。今度またふぐ料理を出していただきましたら、訪問団の皆は平然とふぐを口に運び、積極的に堪能するでしょう。

これは友好都市との交流によってもたらした「変化」と考えられます。



中国のネット用語では、「^{zhì yí}质疑、^{lǐ jiě}理解、^{chéng wéi}成为」という、日本語で説明すれば「疑問に思って、理解して、受け入れる」という言葉があります。人間は誰しも不慣れなものやことに不安感を覚えるものですが、始めの一步を踏み出さなければ、あくまでも拒否したままで自分の目の前の世界がなかなか広がらないでしょう。好きになるまでいかなくても、少なくともそれを理解できるような人間になると思います。物事を理解してはじめて可能性が生まれ、これからのことが語られるわけです。

それは食文化にとどまらず、すべての文化に共通すると思われます。中日両国の国民にとって、最初は不慣れで不安感を抱いた物事であっても、始めの一步を自ら踏み出すことによって理解し、受け入れるようになることは少なくはないでしょう。例えば、お刺身、ふぐ、ウォッシュレット、ピータン、タピオカなど色々。

そのために、国際交流員の仕事をきっかけに、下関市民がもっと中国や青島を、また青島市民がもっと日本や下関を理解していただけるような活動に携わりたいといつも思っております。これからも異文化を中心に、私の体験や感想などを皆にシェアしたいと思ひます。よろしくお願ひします！